

## 塔の畝（江良番匠の話）

小田の里に「塔の畝」という小さな丘があるんじや。今から四百年くらい前のことじやがお、小田に林長左衛門という長者さんが住んどったんじや。信仰のあつい人じやったので、竹林寺に三重の塔を建てたいと考えて、腕のよい大工をやとったんじや。本郷の江良に住む江良番匠という近辺では並ぶ者のない大工が、最高の材をつかって三年余りの年月をかけたんじや。この丘で仮の組立てをしたんじやが、それはそれは京の都とまごうばかりの立派で美しい三重の塔じやった。

「みごとなものじや。」林の長者は木組みの一寸のくるいのない姿に満足そうな笑みを浮かべた。

「みなもの者、この三重の塔は仏の集う浄土を現世に表わしたもののじや。竹林寺に運ぶ途中に地面に下ろしてはならんぞ。」長者さまはそう言うのと、解体されて一本一本運ばれる木組みをきびしく見守ったそうじや。

江良番匠は、竹林寺の塔を建てる場所が、余りにも強い西風を受ける場所であることを心配していた。しかし、師の武田番匠は「とるにたらぬことじや」と取り上げる気はなかった。

「一寸五分の重みを西に移しておかんと、この塔は長くはもたんじやろ」江良番匠は秘かにホゾ組みを束に移動させた。匠として悩みに悩んだ末の、命をかけた技であった。

箕山竹林寺にみごとに建立された三重の塔の下に立った林の長者は、「みごとじや。美しい塔は皆の者を浄土に導いて下さるじやろう。」と大いにほめたたえた。しかし、師の武田番匠は「じやが、江良番匠よ。塔が西にわずかに傾いておるのは何故じや。儂の目に止まらんとするたか。」と、厳しく問い正した。かわいそうに、誰かが告げ口をしたに違いないんじや。

ある強い風と雨の降る夜じやった。江良番匠は塔の上に立った。

荒れくるう強い西風を受けつつも塔はビクともせぬ強さでまっすぐに堂々と立っていた。番匠は塔の柱にいとおいそうに手を置くくと、満足そうにほほえみを浮かべた。

変わりはてた江良番匠の姿が塔の下に見つかったのは次の日の朝のことじやった。

それからこの林の長者には不幸が続いたんじや。大盗賊が入って家中の金銀財宝をことごとく運び出したんじや。召使いの「お松」という女が手引きをしたが、お松も用が済めば殺されて埋められたんじや。

だまされて手伝うたんじやろうが、かわいそうなことじや。金銀財宝は、あまりにもぎょうさんあるんで埋めて隠したそうじや「黄金塚」といわれておるが、掘ったらたたりがあるそうで、掘った人はおらんそうじや。

